『梧桐雨』雑劇における楊貴妃と嫦娥

櫻木陽子

はじめに

『長恨歌』をはじめとして、多くの文學作品を生み出して來た唐玄宗（明皇）と楊貴妃の物語は、元雑劇においてもそれを題材として幾つかの作品が作られたが、玄宗あるいは楊貴妃を主役とする作品で現存するのは、殘念ながら、玄宗を主役とする白仁甫（白樸）『唐明皇秋夜梧桐雨』（簡名『梧桐雨』）雑劇[1]のみである。『錄鬼簿[2]』には、『梧桐雨』雑劇と同じく、玄宗か楊貴妃が主役と思われる雑劇の題が記載されているが、どれも完全な形では現存していない。關漢卿『唐明皇哭香囊』（簡名『哭香囊』、正名『唐明皇啓瘞哭香囊』）雑劇と岳伯川『羅公遠夢斷楊貴妃』（簡名『楊貴妃』）雑劇は、馬嵬坡で楊貴妃が死を迫られる場面を描く套數が一部分殘されるのみで[3]、白仁甫『唐明皇遊月宮』（簡名『幸月宮』）雑劇と庾吉甫『楊太眞霓裳怨』（簡名『霓裳怨』）雑劇、同じく庾吉甫『楊太眞華清宮』（簡名『華清宮』、正名『楊太眞浴罷華清宮』）雑劇は題しか殘されていない。

その『梧桐雨』雑劇において描かれる玄宗と楊貴妃の物語の解釋については様々な議論があり、特に清代戯曲『長生殿』と比べると、『梧桐雨』雑劇に對する評價は低いと言わざるを得ない。本稿では特にこれまで論じられることが少なかった、玄宗と楊貴妃二人のなれそめにおいて言及される、玄宗の中秋月宮行（明皇遊月宮）の物語と、そこに登場する嫦娥と楊貴妃との關係に着目して、『梧桐雨』雑劇における玄宗と楊貴妃の物語について論じていきたい。

一　玄宗と楊貴妃のなれそめについて

從來、『梧桐雨』雑劇の評價が低い原因の一つは、玄宗と楊貴妃がもとは舅と嫁の關係であったという史實を隱していない點にある。『梧桐雨』雑劇の、正末玄宗が初めて登場した時のセリフに、楊貴妃とのなれそめを語る部分がある。

『梧桐雨』雑劇　第一折（楔子[4]）

（正末扮唐玄宗駕、旦扮楊貴妃、引高力士、楊國忠、宮娥上[5]）（正[6]）……。六宮嬪御雖多、自武惠妃死後、無當意者。去年八月中秋、夢遊月宮、見嫦娥之貌、人間少有。昨壽邸楊妃、絶類嫦娥、已命爲女道士。既而取入宮中、策爲貴妃、居太眞院。寡人自從太眞入

宮、朝歌暮宴、無有虚日。
（正末は唐玄宗の天子に扮し、旦は楊貴妃に扮し、高力士、楊國忠、宮女をひきいて登場）（正末）……。後宮には妃が多いとはいえ、武惠妃が亡くなってからは、意に適うものがいなかった。去年の八月中秋に、夢で月宮に遊びに行き、嫦娥の容貌を見たが、人間世界では稀な美しさであった。先頃壽王の邸の楊妃が、嫦娥に極めて似ているので、女道士になるように命じた。やがて後宮に入れて、貴妃の位を與え、太眞院に住まわせている。朕は太眞が後宮に入ってからというもの、朝には歌舞に暮れには宴が途切れる日はない。

このセリフでは、玄宗が息子壽王の妃であった楊氏を自分の妃にするために、女道士に出家させて壽王と離縁させたことがあかされる。そしてそのきっかけは、玄宗が「去年八月中秋」に夢で月宮に行って嫦娥の容貌を見たことであったとされる。この嫦娥が單なる美人の比喩ではないことは明らかである。[7]

『梧桐雨』雜劇の、特にセリフの部分には史書に基づいて作られている箇所の多いことは先行研究において既に指摘されているが、[8]この玄宗のセリフも『新唐書』卷七十六や『資治通鑑』卷二百十五の記載に基づいている。

『新唐書』卷七十六　后妃傳[9]

玄宗貴妃楊氏、……。始爲壽王妃。開元二十四年、武惠妃薨、後廷無當帝意者。或言妃姿質天挺、宜充掖廷、遂召内禁中、異之、即爲自出妃意者、丐籍女官、號太眞。更爲壽王聘韋詔訓女、而太眞得幸。……。天寶初、進册貴妃。

玄宗の貴妃楊氏は、……。始めは壽王妃爲り。開元二十四年、武惠妃の薨ずるや、後廷に帝の意に當たる者無し。或るひと言うに「妃の姿質は天挺なり、宜しく掖廷に充つべし」と。遂に召して禁中に内るるに、之を異とし、即ち自ら妃の意に出づる者と爲し、丐わせて女官に籍し、太眞と號せしむ。更めて壽王の爲めに韋詔訓の女を聘し、而して太眞　幸を得る。……。天寶の初め、貴妃に進册す。

先程引用した玄宗のセリフの前、つまり玄宗が登場する前には、安祿山の敗戰にまつわる狀況が描かれるが、そこでも『新唐書』や『資治通鑑』などの記載を踏襲した表現が目立つ。[10]『梧桐雨』雜劇で楊貴妃が玄宗の息子壽王の妃であった史實が隱されていないのも、史書の記載をそのまま用いた結果と解釋することができよう。しかし玄宗が楊貴妃とのなれそめを語る段では、史書を引用したような表現の中に、夢の出來事と斷りながらも、月宮に行って嫦娥に會ったというファンタジー色のある物語が插入されている。これはなぜであろうか。

またこの後には、楊貴妃が玄宗とのなれそめを語るセリフがある。ここでは、當時は壽王妃であった楊氏が、中秋が誕生日である玄宗の誕生祝いに行くという、舅と嫁が顔を合わせる狀況として、より現實味のある設定が語られる。そしてこのセリフでも、玄宗のセリフ同樣に、玄宗が楊貴妃を見初めた理由を楊貴妃が嫦娥に似ていたからとしている。[11]

『梧桐雨』雜劇　第一折[12]

（旦扮貴妃、引宮娥上）[13]妾身楊氏、弘農人也。父親楊玄琰、爲蜀州司戶。

開元二十二年、蒙恩選爲壽王妃。開元二十八年八月十五日[14]、乃主上聖節、妾身朝賀。聖上見妾貌類嫦娥、令高力士傳旨、度爲女道士、住内太眞宮、賜號太眞。天寶四年[15]、册封爲貴妃、半后服用[16]、寵幸殊甚。

（旦は貴妃に扮し、宮女をひきいて登場）わたくしは楊氏、弘農の出身です。父の楊玄琰は蜀州司戸でした。開元二十二年にかたじけなくも壽王妃に選ばれました。開元二十八年八月十五日は、皇帝陛下のお誕生日で、わたくしは朝賀いたしますと、陛下はわたくしの容貌が嫦娥に似ていると思し召して、高力士に女道士として出家させるよう詔を傳えさせ、内の太眞宮に住まわせ、太眞という號を賜りました。天寶四年に貴妃に册封され、皇后の半分の待遇を受け、殊の外寵愛を受けております。

楊貴妃を「弘農人」とするのは、『資治通鑑』『舊唐書』『新唐書』には見えない。陳鴻『長恨歌傳[17]』には「詔高力士潛搜外宮、得弘農楊玄琰女於壽邸。」（高力士に詔して潛かに外宮を搜さしめ、弘農の楊玄琰の女を壽邸に得たり。）とある。その他の記述とも比べ合わせると、このセリフは『楊太眞外傳』の記載に近いと思われる。

樂史『楊太眞外傳[18]』卷上

楊貴妃小字玉環、弘農華陰人也。後徙居蒲州永樂之獨頭村。高祖令本、金州刺史。父玄琰、蜀州司戸。……。開元二十二年十一月、歸於壽邸。二十八年十月、玄宗幸溫泉宮。使高力士取楊氏女於壽邸、度爲女道士、號太眞、住内太眞宮。天寶四載七月、册左衞中郎將韋昭訓女配壽邸。是月、於鳳凰園册太眞宮女道士楊氏爲貴妃、半后服用。

楊貴妃は小字は玉環、弘農華陰の人なり。後に蒲州永樂の獨頭村に徙居す。高祖令本は金州刺史なり。父玄琰は蜀州司戸なり。……。開元二十二年十一月、壽邸に歸ぐ。二十八年十月、玄宗溫泉宮に幸す。高力士をして楊氏の女を壽邸より取り、度して女道士と爲し、太眞と號し、内の太眞宮に住まわしむ。天寶四載七月、左衞中郎將韋昭訓の女を册して壽邸に配す。是の月、鳳凰園にて太眞宮の女道士楊氏を册して貴妃と爲し、后の服用を半にす。

ここから楊貴妃のセリフは、二人の出會いの時期が開元二十八年の十月から八月十五日の中秋に變えられている以外は、おおかた『楊太眞外傳』の記載に基づいて、壽王妃だった楊氏が玄宗の貴妃になるまでの經緯を年代ごとに正確に述べようと意識して作られていることがわかる。おそらく史書に準ずる資料として『楊太眞外傳』が利用されたと思われる。

ところがこの楊貴妃のセリフと玄宗のセリフを比べると、二人のなれそめについて、玄宗と楊貴妃の時間的な認識が一致しないことがわかる。楊貴妃のセリフでは、開元二十八年（七四〇）に玄宗に見初められて女道士になってから、天寶四載（七四五）に貴妃になるまで五年が經過している。貴妃になってから、長生殿で七夕の夜に愛の誓いをする第一折の時點までも、更にある程度の時間が經っているはずである（『長恨歌傳』では、仙宮の楊貴妃が長生殿を天寶十載（七五一）の出來事と言っている）。しかし玄宗は、月宮に行った夢を見た時を「去年」と言っており、セリフを發した時點、つまり既に楊氏を自分の貴妃としている時點まで一年しか經っていないと認識しているようにみえる。

玄宗が夢で去年八月中秋に月宮に行って嫦娥に會ったことは、史書には載っていない。しかし月宮行以外の記述は基づく資料がわかるような書かれ方がされており、この明らかな二人の時間の認識の不一致は作者の不注意とは考えにくい。また後世の改作であれば、このようなわかりやすい時間の不一致は、多少は一致する方向に改められてしかるべきであろう。從って、意圖的に二人のセリフの基づく史料が變えられて二人の認識が食い違うようにセリフが書かれている可能性が高いと思われる。

はじめに、白仁甫の雜劇に『唐明皇遊月宮』という題の作品があったことに言及したが、『梧桐雨』雜劇のこの玄宗の月宮行や嫦娥との出會いの内容も、この『唐明皇遊月宮』雜劇の内容と重なると思われる。また岳伯川『羅公遠夢斷楊貴妃』雜劇の羅公遠は、玄宗を月宮に連れて行く道士として、『太平廣記』に名が擧がっており（後述）、『羅公遠夢斷楊貴妃』雜劇には月宮行の物語を題材にした内容が含まれていたはずである。また霓裳羽衣曲は南宋の王灼『碧雞漫志』巻三で考證されているように、玄宗が月宮で見聞した音樂に基づいて製作されたという説が傳えられる樂曲であり、庾吉甫『楊太眞霓裳怨』（簡名『霓裳怨』）雜劇にも、月宮行の物語と關連する部分が含まれていた可能性がある。このように玄宗と楊貴妃の物語を題材にした雜劇の中で、月宮行を題材にした雜劇は一定の割合を占めていることから、月宮行は元雜劇の世界では比較的よく知られていた物語であったと思われる。從って、この月宮行の物語は、『梧桐雨』雜劇制作當時から既に『梧桐雨』雜劇の物語世界の中に入っていたと考えるのが妥當である。

しかし單に、『唐明皇遊月宮』雜劇において月宮行の物語を書いているから、或いは有名な物語だからというだけで、『梧桐雨』雜劇でも月宮行に言及したのであろうか。『梧桐雨』雜劇全體の物語の内容や、一般的に知られた二人のなれそめから見れば、嫦娥に關する物語はむしろ無いほうが全體の物語はわかりやすくなる。わざわざ書いている以上、書いた理由が存在するはずである。

二　玄宗の中秋月宮行の物語

玄宗が中秋の夜に月宮に行く物語（明皇遊月宮）は、實は唐宋代から見られる。唐宋代の主要な月宮行の作品として、柳宗元の作とされる[19]『河東先生龍城錄』「明皇夢遊廣寒宮」、唐末五代期の作とされる敦煌文獻[20]「葉淨能詩」や、『太平廣記』巻二十二「羅公遠」、巻二十六「葉法善」等が擧げられる。

『河東先生龍城錄』「明皇夢遊廣寒宮[21]」

開元六年、上皇與申天師道士鴻都客八月望日夜、因天師作術、三人同在雲上遊月中。……。下見有素娥十餘人。皆皓衣乘白鸞往來、舞笑於廣陵大桂樹之下。又聽樂音嘈雜。亦甚清麗。上皇素解音律、熟覽而意已傳。頃天師亟欲歸、三人下若旋風。忽悟若醉中夢廻爾。次夜上皇欲再求往、天師但笑謝而不允。上皇因想素娥風中飛舞袖被、編律成音、製霓裳羽衣舞曲。自古洎今、清麗無復加於是矣。

開元六年、上皇は申天師、道士鴻都客と八月望日の夜に、天師の術を作すに因りて、三人同に雲上に在りて月中に遊ぶ。……。下に素娥の十餘人有るを見る。皆な皓衣にして白鸞に乘り往來し、廣陵の大桂樹の下に於いて舞い笑う。又た樂音の嘈雜なるを聽く。亦た甚だ清麗なり。上皇は素より音律を解し、熟く覽るに意已に

傳う。頃くして天師は亟かに歸らんと欲し、三人の下りること旋風の若し。忽ち悟るに醉中の夢より廻るが若きのみ。次の夜、上皇　再び往くを求めんと欲するも、天師は但だ笑い謝するのみにて允めず。上皇　因りて素娥の風中に袖被を飛び舞わすを想い、律を編じ音を成し、霓裳羽衣舞曲を製る。古より今に洎ぶに、清麗なること復た是れに加うる無し。

「葉淨能詩[22]」

八月十五日夜、皇帝與淨能及隨駕侍從、於高處翫月。……。淨能作法、須臾便到月宮內。……。又見數箇美人、身着三殊(銖)之衣。手中皆擎水精之盤。盤中有器、盡是水精七寶合成。皇帝見皆存禮度。……。便乃作法、須臾却到長安。

八月十五日の夜、皇帝　淨能及び駕に隨う侍從と、高處に於いて翫月す。……。淨能　法を作すや、須臾にして便ち月宮內に到る。……。又た數箇の美人を見るに、身に三銖の衣を着る。手中に皆な水精の盤を擎つ。盤中に器有り、盡く是れ水精七寶を合成す。皇帝　見るに皆な禮度を存つ。……。便ち乃ち法を作せば、須臾にして却りて長安に到る。

『太平廣記』卷第二十二　神仙二十二「羅公遠[23]」

開元中、中秋望夜、時玄宗於宮中翫月。公遠奏曰、陛下莫要至月中看否。乃取拄杖、向空擲之、化爲大橋。其色如銀。請玄宗同登。約行數十里、精光奪目、寒色侵人。遂至大城闕。公遠曰、此月宮也。見仙女數百、皆素練寬衣、舞於廣庭。玄宗問曰、此何曲也。曰、霓裳羽衣也。玄宗密記其聲調。遂回、却顧其橋、隨步而滅。且召伶官、依其聲調作霓裳羽衣曲。

開元中、中秋の望夜、時に玄宗は宮中に於いて翫月す。公遠奏して曰く「陛下は月中に至りて看るを要める莫きや否や」と。乃ち拄杖を取りて、空に向かいて之を擲げるや、化して大橋と爲る。其の色は銀の如し。玄宗に同に登らんことを請う。およそ行くこと數十里、精光は目を奪い、寒色は人を侵す。遂に大城闕に至る。公遠曰く「此れ月宮なり」と。見れば仙女數百、皆な素練寬衣にして、廣庭に於いて舞う。玄宗　問いて曰く「此れは何れの曲なるか」と。曰く「霓裳羽衣なり」と。玄宗　密かに其の聲調を記す。遂に回るに、其の橋を却顧するに、歩みに隨いて滅す。且つ伶官を召して、其の聲調に依りて霓裳羽衣曲を作る。

『太平廣記』卷第二十六　神仙二十六「葉法善」

又嘗因八月望夜、師與玄宗遊月宮。聆月中天樂、問其曲名、曰、紫雲曲。玄宗素曉音律、默記其聲。歸傳其音、名之曰霓裳羽衣。

又た嘗て八月望夜に因りて、師は玄宗と月宮に遊ぶ。月中の天樂を聆き、其の曲名を問うに、曰く「紫雲曲」と。玄宗は素より音律に曉く、其の聲を默して記す。歸りて其の音を傳え、之を名づけて曰く「霓裳羽衣」と。

これら唐宋代の月宮行物語に共通するのは、八月の中秋に玄宗が道士[24]に連れられて月宮に遊びに行き、仙女達に會って舞を見たという內容であり、多くが霓裳羽衣曲の製作と關連している。ただし、嫦娥に會ったという話は見當たらない。どれも楊貴妃が玄宗の妃になる前の話である。ここから『梧桐雨』雜劇は、唐宋代の中秋月宮行の內容を

踏まえてはいるが、直接取り入れているわけではないことがわかる。

次に『梧桐雨』雜劇と同時代の作品である王伯成[25]『天寶遺事諸宮調』を取り上げたい。『天寶遺事諸宮調』は、玄宗と楊貴妃の物語を、雜劇よりも長編の諸宮調の形式で描く作品で、これまでの研究でも『梧桐雨』雜劇との關連が指摘されている[26]。

『天寶遺事諸宮調』には、この玄宗の月宮行を描く九種の套數が現存する[27]。鄭振鐸「宋金元諸宮調考[28]」は、この『天寶遺事諸宮調』の月宮行に關する套數と白仁甫『唐明皇遊月宮』雜劇との關係を指摘し、曾永義「楊妃故事的發展及與之有關的文學[29]」は、『天寶遺事諸宮調』が『梧桐雨』雜劇の影響のもとに作られたという觀點から、この『天寶遺事諸宮調』の月宮行關係の套數も、白仁甫の『唐明皇遊月宮』雜劇の內容を踏襲したのであろうと推測している。だが、前述の通り『唐明皇遊月宮』雜劇は題しか殘されていないために、『唐明皇遊月宮』雜劇と『天寶遺事諸宮調』、更には『梧桐雨』雜劇との前後關係を特定することは困難である。しかしながら『天寶遺事諸宮調』と『梧桐雨』雜劇の月宮行の物語はやはり關連が深いと思われる。それは『天寶遺事諸宮調』には、嫦娥と思われる仙女の存在が描かれるからである。

以下、唐宋代の月宮行の內容をふまえて考察した『天寶遺事諸宮調』の月宮行の物語の概要をあげる[30]。

中秋の夜に天師は杖を使って夜空に橋をかけ、玄宗を月宮に連れて行く（「明皇遊月宮」［仙呂宮六么令[31]］）。玄宗は天空を飛び星に近づき、長安を見下ろす（「明皇望長安[32]」）。月宮に近づくと門の前で勇猛な兵士に呼び止められる（「遊月宮[33]」）。月宮の門が開くと音樂が奏でられ、仙女達の舞に玄宗はすっかり夢中になる（「飛上月宮[34]」）。嫦娥と思われる仙女に戀した玄宗は、月宮に壻入りしようかと惱む（「月宮舞[35]」）。道士の葉靖は地上に歸る時間だと玄宗に告げるが（「明皇喜月宮[36]」）、玄宗は緣あって出會えた嫦娥との仲をさかないで欲しいと賴む（「明皇哀哭葉靖[37]」）。地上に歸ることをいやいや承諾した玄宗は嫦娥に來年の再會を期す（「明皇遊月宮」［仙呂宮點絳唇[38]］）。突然猛々しい妖魔が現れ、玄宗は月宮まで仙女に會いに來たことを後悔する（「月宮遇妖[39]」）。

このうち「月宮舞」套數では、玄宗は月宮で會った仙女のうち、嫦娥と思われる特定の一人を好きになり、彼女を皇后にしたい、彼女と結婚するために地上に歸りたくない、と思う玄宗の心情が描かれる。「匹如向塵世爲君、爭如就月宮作贅。」や「別選良夜再奉歡會。」等の表現から、玄宗の戀の相手が月宮の仙女であることは明らかである。

『天寶遺事諸宮調』「月宮舞」套數[40]

［般涉調瑤臺月］香風乍起。曲譜纔調、舞袖初齊。君王覷罷、口兒中不住頻題。最可戲。除是天仙、天仙內偏他可戲。你也忒風韻、忒捻抳。可也忒瀟灑、忒孤悽。思憶。偏妃難稱、中宮正宜。

［么篇］莫非天地暗持携、特地把姻緣配對。猛然割捨、執迷心更不疑惑。匹如向塵世爲君、爭如就月宮作贅。趨進却退。色慾願戀、却徘徊避、別選良夜再奉歡會。

［般涉調瑤臺月］香しい風が起これば、曲譜は整えられ、仙女達の舞う袖が揃う。見終わると帝は、口の中ではしきりにぶつぶつ言う。一番愛らしい。ただ仙女だけ、その仙女の中でも彼女が特

に愛らしい。君はとてもあでやかで、とてもしとやか。しかしとても寂しげでとても孤獨。思うに、妃では合わない、皇后が正にふさわしい。

［公篇］あるいは天地がひそかに取り持って、わざわざこの縁を結ぼうとしているのではあるまいか。急に何も顧みずに、戀に取りつかれて搖らがない。たとえ俗世の君主の位であっても、どうして月宮の壻入りに及ぼうか。進むか退くか。色欲では引かれつつも、やはりあれこれ迷ってしまう。また良き夜を選び、もう一度お會いしよう。

夜が明けると地上に歸れなくなるという道士の說得に、玄宗は澁々地上に歸ることを承諾するが、翌年の中秋での再會を期する。嫦娥は中秋の夜にしか現れないようである。

『天寶遺事諸宮調』「明皇遊月宮」套數［仙呂宮點絳唇］[41]

［金盞兒］師父你也快差排。莫推捱。此閒配對權寧奈。敎宮內取些金帛。寡人待自手纏上錦、親插鬢邊釵。欲求天外事、須動世閒財。

……

［賺煞］且寄此宵情、只從明朝害。整整的相思一載。到來歲中秋顯素色。休等閑敎霧鎖雲埋。却早離了粧臺。准備迎風戶半開。則向那初更左側。我試等待。看月明千里故人來。

［金盞兒］師父、あなたも早く手配しなさい。ぐずぐずしてはいけない。ここでの婚禮はしばらく我慢しよう。宮中に婚禮の黃金や絹を取りに行かせ、朕がてづから錦をかけてあげよう、自ら髮に釵を插してあげよう。天上のことを求めるにしても、俗世の財を使うべきだ。

……

［賺煞］今宵しばし思いを寄せたばかりに、明日から苦しむだけ。まるまる一年思い續け、來年の中秋に白き姿を顯す。その時はわけもなく霧や雲に閉ざされてはならない。早めに鏡臺を離れて、「風を迎え戶を半ば開く」準備をして下さい。その日の初更前後、私は待つとしよう。「月は千里を明るくし故人の來たる」のを。

このように『天寶遺事諸宮調』では、玄宗は月宮で嫦娥と思われる仙女と結婚しようとしたが、地上に歸らなければならなくなったので、次は婚禮の準備を整えて翌年の中秋にまた月宮に來ようと思っていたのである。

そこで、この『天寶遺事諸宮調』の月宮行によって物語を補って、『梧桐雨』雜劇の玄宗と楊貴妃のなれそめの內容を考えると、玄宗は前の年の中秋の段階で、翌年の中秋には嫦娥と結婚するつもりでいた。だからこそ、その中秋の日に嫦娥に似た壽王妃楊氏に會うと、嫦娥との約束を思い出して、楊氏を自分の妃にするために女道士にさせたという流れが見えてくる。

また『梧桐雨』雜劇の、玄宗のセリフと楊貴妃のセリフで、壽王妃楊氏が玄宗の貴妃になるまでの時閒の認識に不一致が見られるのは、玄宗のセリフの時閒の認識はこの月宮行の物語を踏まえていることが原因であろう。そしてそれは、玄宗は地上に歸ってきてからも、ある意味でずっと夢見心地だったことを暗示している。夢見心地だったからこそ、玄宗には通常の判斷力が缺如しており、息子の妃であった楊氏を自分の妃にできたのではないだろうか。

更に『天寶遺事諸宮調』には、玄宗の月宮行を描く場面に、後の亡國の運命を暗示する表現が散見される。特に「月宮遇妖」套數では、玄宗が地上に歸らずに嫦娥と結婚したいと切望していた時に、恐ろしい妖魔が現れて、玄宗は嫦娥に戀をしたことを後悔する。

『天寶遺事諸宮調』「月宮遇妖」套數[42]

［雙調快活年］爲貪眼底情、引起身邊禍。因尋月裏仙、頓開門上鎖。起陣狂風、迸道寒光、見箇妖魔。世相逢也、怎生奈何。

［雙調快活年］目の前の愛情を追いかけたために、身の禍いを引き起こした。月の仙女を尋ねたがために、突然門の鍵が開いた。一陣の狂風が起こり、一筋の寒光が射し込むと妖魔が現れた。出會ってしまったからには、どうすればよいのか。

この套數は、玄宗が後に安祿山の亂によって亡國の憂き目に遇う運命を豫言していると解釋することができる。嫦娥に戀して妖魔に出くわすことは、楊貴妃を寵愛して安祿山の亂に遭うことの豫知夢として描かれているという解釋も可能であろう。

三　「十美人」について

先程、唐宋代の玄宗の月宮行は多くが霓裳羽衣曲の製作と關連して描かれることに言及したが、『梧桐雨』雜劇でも第二折のはじめに、霓裳羽衣曲の演奏や楊貴妃の舞の場面が描かれる。

『梧桐雨』雜劇　第二折[43]

（正末扮駕[44]、引高力士、鄭觀音抱琵琶、寧王吹笛、花奴打羯鼓、黃翻綽執板、十美人[45]捧正旦上）

（正[46]）今日新秋天氣、寡人朝回無事、妃子學得霓裳羽衣舞、同往御園中沉香亭下、閑耍一番。

（正末は天子に扮し、高力士を連れ、鄭觀音は琵琶を抱き、寧王は笛を吹き、花奴は羯鼓を叩き、黃翻綽は拍板を持ち、十美人は正旦にかしずいて登場）

（正末）今日は新秋の候、朕は政務も終わって用もなし。妃が霓裳羽衣の舞を習得したというので、共に御園の沉香亭に行って、少し遊ぶとしよう。

ところで、ト書きにある「十美人」はこの第二折で突然登場し、以後は登場しない。通行本である元曲選本や、酹江集本には「十美人」の三文字は省略されて「正末引高力士、鄭觀音抱琵琶、寧王吹笛、花奴打羯鼓、黃翻綽執板、捧正旦上」となっているが、鄭觀音達が樂器を持ちながら楊貴妃にかしずくのであれば不自然であることから、「十美人」は本來あるべき言葉だと考えられる。楊貴妃にかしずく「十美人」は宮女である可能性が高いが、それまで宮女は「宮娥」と書かれてあり、「十美人」という言葉が何か特定の意味を持つ可能性は高い。

唐代の筆記小說『明皇雜錄』逸文に、「仙子」が玄宗に「紫雲迴」という曲を授ける物語があり、宋代の『楊太眞外傳』にも類似の記載がある。

鄭處誨『明皇雜錄』逸文[47]

玄宗夢仙子十餘輩。御卿雲而下、各執樂器懸奏之。曲度淸越。一仙人曰「此神仙紫雲迴。今傳授陛下。爲正始之音」。上覺、命

玉笛習之、盡得其曲。

玄宗　仙子十餘輩を夢む。卿雲を御して下り、各おの樂器を執りて懸けて之を奏す。曲度は清越なり。一仙人曰く「此れ神仙紫雲迴なり。今、陛下に傳授せん。正始の音と爲さん」と。上　覺めて、玉笛に命じて之を習わしめ、盡く其の曲を得る。

樂史『楊太眞外傳』卷上

上嘗夢十仙子、乃製紫雲迴。（玄宗嘗夢仙子十餘輩。御卿雲而下、各執樂器、懸奏之。曲度清越、眞仙府之音。有一仙人曰「此神仙紫雲迴。今傳授陛下。爲正始之音」。上喜而傳受。寤後、餘響猶在。旦、命玉笛習之、盡得其節奏也。）

上　嘗て十仙子を夢み、乃ち紫雲迴を製る。（玄宗　嘗て仙子十餘輩を夢む。卿雲を御して下り、各おの樂器を執り、懸けて之を奏す。曲度は清越にして、眞に仙府の音なり。一仙人有りて曰く「此れ神仙紫雲迴なり。今、陛下に傳授せん。正始の音と爲さん」と。上　喜びて傳受す。寤めし後、餘響猶お在り。旦、玉笛に命じて之を習わしめ、盡く其の節奏を得るなり。）

「十」という數字や音樂との關係から、『明皇雜錄』逸文の「仙子十餘輩」や『楊太眞外傳』の「十仙子」は、『梧桐雨』雜劇の「十美人」の題材の一つだと思われ、「十美人」が仙界や音樂に關連のある人物である可能性を示している。また「紫雲迴」という曲名は、前述の『太平廣記』「某法善」に出てくる「紫雲曲」を思い起こさせる。

『天寶遺事諸宮調』には、玄宗が中秋の夜に後宮で楊貴妃と賞月の宴を開く場面を描く「十美人賞月」套數[48]という長編の套數がある。最初、玄宗は後宮の女性達の美しさに目を見張り、月宮に行かなくてもよかったと後悔する。

『天寶遺事諸宮調』「十美人賞月」套數[49]

［油葫蘆］滿袖天香惹瑞烟。風力軟。九龍獨趂五雲軒。誰承望開元天子昭陽殿。生扭做蕋珠王母蟠桃宴。預先爭遊廣寒、沒來由拋禁苑。恰來恁早些兒與朕疾相見。怎肯去月宮裡覓神仙。

［天下樂］既看這十五團圓照滿天。待把箇堪憐親自選。將這可喜娘臉兒都覷遍。兀的那箇合疎、那一箇偏。寡人則索告青天乞少年。

［油葫蘆］袖にあふれる天香は瑞煙を卷き起こし、風はやわらか。帝はお一人で五雲の御車に乘り月に赴いたが、まさか開元の天子の昭陽殿で、むりやり天上の蕊珠宮の西王母の蟠桃宴が開かれるとは。先になぜ廣寒宮に遊びに行ったのか、わけもなく後宮を捨てて。先程會ったあなた達ともう少し早く會えていたら、どうして月宮まで神仙に會いに行ったりしようか。

［天下樂］この十五夜の丸いお月樣が滿天を照らすのを見たからには、愛すべき人を自ら選びたい。このかわいい娘達の顏を皆一通り見たが、こりゃ誰を遠ざけるべきで、誰と親しくなろうか。朕は若さを取り戻したいと天に祈りたい氣分だ。

後宮の女性達の美しさに目を奪われた玄宗だが、楊貴妃の姿が見えないのに氣がついて、慌てて楊貴妃を呼び、楊貴妃の機嫌を取りながら名月を樂しむ。「十美人賞月」套數の表現の大きな特徴は、中秋の月と楊貴妃の美しさを對比させて描いている點にある。

［醉扶歸］[20]則爲你占斷風流選。奪盡可憎權。萬里江山正朗然。爲甚忽地浮雲顯。爲你强如他萬千。因此上怕見你那羞花面。

［醉扶歸］すべて君が私の戀を獨占し、後宮の女性から愛される權利を奪い盡くした。萬里の山河は月に照らされて光り輝いていたのに、どうして急に浮き雲があらわれたのだろう。君が彼女よりも千萬倍美しいから、君のその、花も恥じらう面差しを見るのを恐れるがゆえに。

「十美人賞月」という題は『雍熙樂府』の題で、『詞林摘艶』丁集にも「十美人賞月」と注記されている。しかし曲辭には「十美人」という言葉は出てこない。だが［天下樂］の內容から、「十美人賞月」の「十美人」は、玄宗がいっとき心引かれる後宮の女性達（楊貴妃以外の妃か宮女）を指すと考えられる。また「十美人賞月」套數には、『梧桐雨』雜劇の「十美人」との關連が明確になる表現は得られないが、內容から兩者の「十美人」がともに、楊貴妃以外の後宮の女性達を指すのは明らかである。

この他にも「十美人賞月」套數と『梧桐雨』雜劇には幾つかの共通點がある。「十美人賞月」套數で描かれる楊貴妃の中秋の宴は、玄宗が月宮に行った後の出來事として描かれ（［油葫蘆］）、さらに「去歲人無恙、今秋月正圓。」（［後庭花］）と、玄宗が月宮に行ったのが去年であったことを思わせる表現もある。これは先に引用した『天寶遺事諸宮調』の別の套數の表現「整整的相思一載。到來歲中秋顯素色。」（「明皇遊月宮」［仙呂宮點絳唇］［賺煞］）とも合致し、『梧桐雨』雜劇の玄宗のセリフにある「去年八月中秋」の時間設定とも共通する。また［油葫蘆］では、地上の後宮での中秋の宴が、その前の年に玄宗が月宮で見た嫦娥の宴にも劣らないと表現されている。これらのことから總合して「十美人賞月」套數では、月世界の月宮と地上の後宮、嫦娥と楊貴妃、月宮の仙女達と後宮の宮女達がそれぞれ對應した關係であり、月宮における嫦娥の宴と後宮における楊貴妃の中秋賞月の宴が相似した世界として描かれていると解釋できる。つまり玄宗にとって、今宵、地上の後宮で行われている中秋賞月の宴は、去年中秋の月宮での宴の再現であり、去年月宮で戀をした嫦娥が地上に下凡して現れたのが、現在は後宮にいる楊貴妃ということになる。

その關係を元に『梧桐雨』雜劇の「十美人」を考えると、後宮の「十美人」に對應するのは月宮の仙女達であり、月宮での嫦娥と仙女達との關係が後宮での楊貴妃と宮女達の關係と考えることもできよう。第二折で楊貴妃は玄宗が月宮で見聞した曲を元に作った霓裳羽衣の舞を舞うことから、『梧桐雨』雜劇の「十美人」はその楊貴妃の周りで一緒に舞う宮女達と考えることができる。

このように『天寶遺事諸宮調』と『梧桐雨』雜劇の物語世界を合わせて考えると、『梧桐雨』雜劇で第二折に「十美人」が楊貴妃にかしずいて登場することはさほど不自然なことではなくなる。

四　『梧桐雨』雜劇における月宮行の物語の意味

現在、私達が目にすることのできる『梧桐雨』雜劇において、玄宗が夢で月宮に行って嫦娥に戀をしたことは、楊貴妃が玄宗の寵愛を受け、物語が始まるきっかけになっている。だが月宮行の物語に關する記述は斷片的で、しかもすべて曲辭ではなく、セリフやト書きの部分にある。しかし一概にそれらが後世の改作であるとは言い切れないところがある。

第一に、月宮行の物語そのものは唐宋代から複數の文獻に見られる。また玄宗が月宮で見聞した曲を元に霓裳羽衣曲が作られたという傳説も有名であり、白仁甫は『梧桐雨』雜劇制作時に月宮行の物語を知っていたはずである。更に白仁甫の雜劇作品には『梧桐雨』雜劇の他に、『唐明皇遊月宮』という題の作品があった。兩者の先後關係は不明であるが、嚴敦易『元劇斟疑』では、『遊月宮』雜劇は『梧桐雨』雜劇の前段階の物語を描き、『遊月宮』雜劇と『梧桐雨』雜劇が二部連作であったと推測している（五九六頁）。連作かどうかはともあれ、この二作品が共通の物語背景やイメージを持って作られた可能性は高いと思われる。

また、もし假に後世になって月宮行の物語に關する記述が付け加えられたとすれば、多少は『梧桐雨』雜劇の物語全體の文脈との調和が取れるように書かれるはずであろう。だが、月宮行に關する記述はその周りとの調和を缺いており、むしろ、ない方が『梧桐雨』雜劇全體の物語はわかりやすくなる。現に元曲選本では「十美人」の三文字が省略されていることは、その記述が周りの文脈から浮いていることの證左である。それでも斷片的な記述が殘っていることは、『遊月宮』雜劇等、月宮行の物語に關する雜劇作品が存在していた頃には、斷片的な記述でも理解できたことを示しているのではないだろうか。

そして同時代の諸宮調作品である『天寶遺事諸宮調』の月宮行の物語を『梧桐雨』雜劇の斷片的な記述に照らし合わせれば、『梧桐雨』雜劇だけを見ていれば周りから浮いた記述も、全體像を理解する筋道が見えてくる。『梧桐雨』雜劇の月宮行の物語は、『天寶遺事諸宮調』に更に詳しく描かれる月宮行の物語と矛盾せず、一致を見せているのである。

これらのことから、『梧桐雨』雜劇の斷片的な記述は『梧桐雨』雜劇制作當時の月宮行の物語の內容をかなり反映していると思われる。

『梧桐雨』雜劇の物語の背景に月宮行の物語が存在することは、玄宗と楊貴妃の物語にとって、どのような意味を持つのであろうか。

これまで考察してきたように、月宮行の物語は、玄宗と楊貴妃の物語の前段階として位置づけられている。しかしこの設定は、玄宗と楊貴妃の物語を二人の愛情物語として描くつもりであれば、大きなマイナスである。なぜならば、玄宗は楊貴妃その人を愛したわけではなく、楊貴妃に嫦娥の面影を求めたという印象を與えてしまうからである。

楊貴妃を嫦娥と結びつけるイメージは、『長恨歌』の、死後に仙宮に住む楊貴妃のイメージとのつながりを感じさせられるが、『長恨歌』と『梧桐雨』雜劇ではその方向性が大きく異なる。『長恨歌』は、馬嵬坡での悲慘な死の後に、楊貴妃を仙女へと昇格させており、そのことで馬嵬坡の悲慘さは薄められる。『梧桐雨』雜劇では、玄宗は月宮で嫦娥に戀をした翌年の中秋に、嫦娥に似た壽王妃楊氏に會うと、嫦娥との戀愛を成就させるイメージで、楊氏を自分の妃にしようと女道士にする。楊貴妃にはいわば嫦娥が下凡したイメージが付與されているのである。だが馬嵬坡で悲慘な最期を迎えた楊貴妃は、死後に玄宗の夢に一度登場するだけで、仙界に住む姿は描かれない。『長恨歌』のような生死を超えた愛情物語は『梧桐雨』雜劇では成立していないのである。

そもそも『長恨歌』では、漢皇に比された玄宗に對する楊貴妃自身の愛情が感じられる表現は、楊貴妃死後の仙宮での場面にしかない。しかもそれは玄宗自らが見聞きしたものではなく、方士によって語られる「物語」である。總じて、『長恨歌』の玄宗と楊貴妃の愛情物語

は美化された虚構で成り立っている。[51]『梧桐雨』雑劇は、方士が仙宮の楊貴妃に會いに行く設定等、『長恨歌』が二人の物語を愛情物語たらしめようとしている虚構を外すことによって、玄宗を現實へと引き戻しているのである。

『梧桐雨』雑劇の第四折で、玄宗は降りしきる秋雨に打たれる梧桐の木に我が身を重ね合わせる。地位も權力も楊貴妃もすべてを失った玄宗に對して、『梧桐雨』雑劇では、『長恨歌』のような楊貴妃からの愛情を感じさせる場面は設定されず、玄宗の楊貴妃への思いが慰められることはない。愛する妃を改葬することすらできない元皇帝は、今やこの梧桐のように虚しく耐え續けるしかない。『梧桐雨』雑劇はこのような冷たい現實に裏打ちされた、救いようのないつらさを、梧桐に降る秋雨に寄せて歌い上げているのである。

おわりに

『梧桐雨』雑劇に描かれるのは、玄宗が夢見た愛情物語が結局は夢、幻想に終わるという現實ではないだろうか。月宮で嫦娥に戀をした玄宗の夢は、第四折で梧桐に降る雨に目を覺まさせられた時に、本當の意味でようやく覺めたのかもしれない。いみじくも『天寶遺事諸宮調』「哭香囊」套數［賺煞尾］に「覩物堪傷。也似人生夢一場。（何を見ても傷ついてしまう、人生は一場の夢のよう。[52]）」という表現があるが、『梧桐雨』雑劇では、榮枯盛衰の人生はすべて夢物語だ、としか言いようのない玄宗の現實を描くために、物語の發端に月宮行の夢、嫦娥への戀愛という布石を設定したという解釋も可能ではないだろうか。

注

（1）白仁甫『梧桐雨』雑劇の概略については、拙稿「『梧桐雨』雑劇の晩秋の季節」（『日本中國學會報』第六十六集　二〇一四年）參照。

（2）鍾嗣成著・賈仲明增補『錄鬼簿』の引用はすべて『中國古典戲曲論著集成』二（中國戲劇出版社　一九五九年第一版）による。

（3）關漢卿『唐明皇哭香囊』雑劇とされる套數は『北詞廣正譜』第十六帙に輯錄され、「關漢卿撰『哭香囊』」と記載される。岳伯川『羅公遠夢斷楊貴妃』雑劇とされる套數は『雍熙樂府』卷二に「馬踐楊妃」として輯錄され、それを『天寶遺事諸宮調』の套數とみなす意見もあるが、その一部が『北詞廣正譜』第二帙に「岳伯川撰『楊貴妃』」として輯錄されており、趙景深『元人雜劇輯逸』（北新書局　一九三五年　十五～十六頁）に考察されているように、岳伯川『羅公遠夢斷楊貴妃』雑劇の一部である可能性が高い。ただし殘された套數の内容は馬嵬坡の場面で、羅公遠は登場しない。

（4）古名家本、顧曲齋本、繼志齋本では第一折（楔子を設けない）。元曲選本、酌江集本では楔子。改定元賢傳奇本はセリフに折を分けない。引用は古名家本による。改定元賢傳奇本は『續修四庫全書』集部戲劇類（上海古籍出版社　一九九五年）所收のもの、その他は『古本戲曲叢刊』（商務印書館　一九五八年）所收のものによる。

（5）酌江集本は「（宮娥上）」を「（宮娥上云）」に作る。

（6）「（正）」を、改定元賢傳奇本と顧曲齋本は「（正云）」に、元曲選本は「（正末云）」に作る。

（7）曾永義「楊妃故事的發展及與之有關的文學」では、唐代から楊貴妃が嫦娥に喩えられていた例を擧げ、『梧桐雨』雑劇で楊貴妃が嫦娥に似ているとされることと關連づけている（初出一九六七年『曾永義學術論文自選集　乙編』［中華書局　二〇〇八年］所收。五頁）。だが楊貴妃の

美貌を嫦娥に喩えることと、『梧桐雨』雜劇のように楊貴妃が嫦娥に似ているということは異なる概念である。

（8）金文京「白仁甫の文學」（『中國文學報』第二十六册　一九七六年）、幺書儀「山川滿目泪衣―白樸《梧桐雨》的時代特徵」（李修生・李眞渝・侯光復編『元雜劇論集』（下）［百花文藝出版社　一九八五年］所收）。

（9）引用は歐陽修・宋祁撰『新唐書』（中華書局　一九七五年）による。

（10）注（8）參照。ちなみに『資治通鑑綱目』（管見したのは『朱子全書』［上海古籍出版社　二〇〇二年］所收のもの）には『梧桐雨』雜劇と共通した記述は見られなかった。

（11）嚴敦易『元劇斟疑』（下）「六十八　楊貴妃」（中華書局　一九六〇年）では、楊貴妃が嫦娥に似ていたとするのは、玄宗が息子壽王の妃を自分のものにした醜聞を少しでも覆い隠そうとした言い譯であるとみるが（五九九頁）、嫦娥に似ていることが、玄宗が息子の妃を奪う正當な理由になり得るとは思われない。

（12）引用は古名家本による。顧曲齋本、元曲選本同じ。

（13）改定元賢傳奇本と酔江集本は「（引宮娥上）」を「（引宮娥上云）」に作る。

（14）改定元賢傳奇本は「八月十五日」を「八月十日」に作る。玄宗の誕生日は八月十五日とされる。

（15）改定元賢傳奇本は「天寶四年」を「天寶四載」に作る。

（16）繼志齋本と酔江集本は「半后服用」を「半用后服」に作る。

（17）『長恨歌傳』の引用は丁如明輯校『開元天寶遺事十種』（上海古籍出版社　一九八五年）による。

（18）『楊太眞外傳』の引用は丁如明輯校『開元天寶遺事十種』（上海古籍出版社　一九八五年）による。

（19）『河東先生龍城錄』の作者については、柳宗元の作とする説と北宋のものとする説がある。李劍國『唐五代志怪傳奇敍錄』上册（南開大學出版社　一九九三年）「龍城錄二卷」（四九三～五〇七頁）に詳しい。

（20）『講座敦煌4　敦煌と中國道教』（大東出版社　一九八三年）「文學文獻より見た敦煌の道教」（遊佐昇著）による。「葉淨能詩」についてはこの章と次の章「道教說話」（小川陽一著）に詳しい。

（21）『河東先生龍城錄』「明皇夢遊廣寒宮」の引用は『百部叢書集成　百川學海』（藝文印書館　一九六五年）による。

（22）「葉淨能詩」の引用は黃征・張涌泉校注『敦煌變文校注』（中華書局　一九九七年）卷二によるが、IDP 國際敦煌項目 http://idp.bl.uk/（最終アクセス日　二〇一六年七月十七日）で公開されている大英博物館藏のS6836によって一部の漢字の表記を改めた。

（23）『太平廣記』「羅公遠」「葉法善」の引用は李昉等編『太平廣記』一（中華書局　一九六一年新一版）による。

（24）玄宗の月宮行における道士の人名の混亂については、前掲の『講座敦煌4　敦煌と中國道教』を參照。

（25）王伯成は『錄鬼簿』に、白仁甫と同じ元代前期の雜劇作家として記載される。

（26）『錄鬼簿』によると『天寶遺事諸宮調』は當時は大變に有名な作品であったらしいが、清初以降に散佚した。しかし複數の曲譜等に斷片的に殘されており、多くの先學の研究によって、全體像がほぼ明らかになっている。『長恨歌』以來の楊貴妃の物語を描く專著のうち『天寶遺事諸宮調』を論じる研究に、遠藤實夫『長恨歌研究』（建設社　一九三四年）、竹村則行『楊貴妃文學史研究』（研文出版　二〇〇三年）がある。また筆者も「『梧桐雨』雜劇の晩秋の季節」（『日本中國學會報』第六十六集　二〇一四年）において兩者の關係を論じたことがある。なお『天寶遺事諸宮調』の現存する套數の收錄狀況や全體像を考察した論考に關し

ては、拙稿「『天寶遺事諸宮調』の物語展開と季節描寫」（『中國古典小説研究』第十五號　二〇一〇年）の附表を參照。

(27) 嚴敦易『元劇斟疑』「楊貴妃」では『雍熙樂府』に輯錄された套數のうち、『雍熙樂府』で「祿山夢楊妃」と題された「飛上月宮」以外の五種を『天寶遺事諸宮調』とするが、そのすべてが『天寶遺事諸宮調』とは限らないとしている（六〇〇頁）。

(28) 『文學年報』（燕京大學國文學會　一九三二年）二〇〇頁。後に『中國文學研究』所收。

(29) 『曾永義學術論文自選集　乙編』［中華書局　二〇〇八年］六頁。

(30) この順序は、「『天寶遺事諸宮調』の物語展開と季節描寫」（『中國古典小説研究』第十五號　二〇一〇年）發表以後に再檢討した順序で、附表のものとは少し異なる。『天寶遺事諸宮調』の輯錄狀況については、拙稿「『天寶遺事諸宮調』輯錄狀況表」（『中國學志』大畜號　二〇一一年）を參照。『天寶遺事諸宮調』の殘曲の順序や物語展開を考察した先行研究のうち、月宮行の物語を筆者のこの順序と同じ順序と考察するものに、武潤婷「『天寶遺事諸宮調』輯佚及連綴」（『中國典籍與文化論叢』第六輯［中華書局　二〇〇〇年］所收）があるが、月宮行の物語を物語の冒頭に位置づける點が、筆者の考察と異なる。また武潤婷氏はその根據を『異人錄』の記載によるとしているが、それは王灼『碧雞漫志』第三の霓裳羽衣曲の項に引用されるもので、『河東先生龍城錄』の記載よりも簡略である。

(31) 「明皇遊月宮」［仙呂宮六么令］は『雍熙樂府』卷五と『九宮大成譜』卷六に全套輯錄。『北詞廣正譜』第三帙に部分輯錄。『雍熙樂府』に「明皇遊月宮」と題のある套數は卷四［仙呂宮點絳唇］のものと卷五［仙呂宮六么令］のものの二種ある。

(32) 「明皇望長安」は『雍熙樂府』卷四に全套輯錄。『北詞廣正譜』第三帙に部分輯錄。

(33) 「遊月宮」は『雍熙樂府』卷十五に全套輯錄。『北詞廣正譜』第七帙と『九宮大成譜』卷二十に部分輯錄。

(34) 「飛上月宮」は趙景深による題名。『雍熙樂府』卷十一に全套輯錄、題は「祿山夢楊妃」。『太和正音譜』卷下、『北詞廣正譜』第十七帙、『九宮大成譜』卷六十五と卷六十六に部分輯錄。

(35) 「月宮舞」は趙景深による題名。『太和正音譜』卷下と『九宮大成譜』卷七十三に全套輯錄。

(36) 「明皇喜月宮」は『雍熙樂府』卷四と『九宮大成譜』卷四十に全套輯錄。

(37) 「明皇哀哭葉靖」は『雍熙樂府』卷四に全套輯錄。『北詞廣正譜』第三帙に部分輯錄。

(38) 「明皇遊月宮」［仙呂宮點絳唇］は『雍熙樂府』卷四に全套輯錄。

(39) 「月宮遇妖」は趙景深による題名。『北詞廣正譜』第一帙と第十七帙、『九宮大成譜』卷七十三に輯錄。

(40) 引用個所は『太和正音譜』卷下と『九宮大成譜』卷七十三に輯錄。本稿で引用する『天寶遺事諸宮調』の原文や題はすべて凌景埏・謝伯陽校注『諸宮調兩種』（齊魯書社　一九八八年）によるが、影印本により一部の漢字表記を改めた。『太和正音譜』は『涵芬樓祕笈』第九集（北京圖書館出版社　二〇〇〇年）に輯錄された明洪武三十一年序刊本の影印本と『中國古典戲曲論著集成』三（中國戲劇出版社　一九五九年第一版）を、『九宮大成譜』は大阪府立中之島圖書館藏の清乾隆十一年序の內府刊本を參考にした。

(41) 引用個所は『雍熙樂府』卷四に輯錄。『雍熙樂府』は『四部叢刊續編』集部（上海書店　一九八五年）に輯錄された明嘉靖四十五年序刊本の影印本を參考にした。

(42) 『北詞廣正譜』は王秋桂主編『善本戲曲叢刊』（臺灣學生書局　一九八

七年）に輯錄された清康熙年間青蓮書屋本の影印本を参考にした。

（43）引用は古名家本による。繼志齋本同じ。

（44）元曲選本と酌江集本は「扮駕」がない。

（45）元曲選本と酌江集本は「十美人」がない。酌江集本は「（捧正旦上云）」に作る。

（46）改定元賢傳奇本と顧曲齋本は「（正云）」、元曲選本は「（正末云）」に作る。

（47）『明皇雜錄』と『楊太眞外傳』の引用は丁如明輯校『開元天寶遺事十種』（上海古籍出版社　一九八五年）による。

（48）「十美人賞月」は『雍熙樂府』卷四に全套輯錄。『詞林摘艶』丁集と『北詞廣正譜』第三帙に部分輯錄。「十美人賞月」套數は多くの先學の研究で『天寶遺事諸宮調』の一部とされているが、嚴敦易『元劇斟疑』では、この套數は雜劇の一折であり、諸宮調ではないとしている（五九〇頁）。

（49）「十美人賞月」套數［油葫蘆］［天下樂］は『雍熙樂府』卷四と『詞林摘艶』丁集に輯錄。

（50）「十美人賞月」套數［醉扶歸］は『雍熙樂府』卷四と『詞林摘艶』丁集、『北詞廣正譜』第三帙に輯錄。

（51）「長恨歌傳」には、楊貴妃は玄宗の息子壽王の妃であったと書かれるが「長恨歌」ではそれが書かれていないことについて、竹村則行「楊貴妃傳說の虛と實―「長恨歌」『長生殿』を中心に―」（九州大學中國文學會編『わかりやすくおもしろい中國文學講義』［中國書店　二〇〇二年］所收）は「そうまでして玄宗と楊貴妃のロマンスを純粹に美化しようとした」と評し（一五四頁）、川合康三『白樂天―官と隱のはざまで』（岩波新書　二〇一〇年）では、「單純化し美化することで、一組の純愛物語が成立するのである」と指摘している（四十九頁）。

（52）引用個所は『雍熙樂府』卷四と『北詞廣正譜』第三帙に輯錄。